

三友会だより

第54号

平成23年4月15日発行
宮崎市神宮西 1-49-1
TEL : (0985)32-2234
<http://www.sanyu-kai.jp/>
発行者 石川 智信

ありがとう そしてさようなら

石川智信

今年の桜は一気に咲きほころんだ。そして一瞬の、気品のある美しさを私たちの脳裏に刻みこんで、今年もみごとに散り消えていった。4月、別れと出会いの季節である。若い時は別れの切なさも、すぐに新たな出会いが消し去ってくれていた。ほろ苦い失恋の痛みも、すぐに新たな恋のときめきが忘れさせてくれた。なんという底知れぬエネルギーであったことか。自分自身が消えるという意識は全くない、ただ未来を信じて生き続ける生命の躍動感が満ちあふれていた。私もまた、そんな青春期を駆け抜けてきたのであろう。今はただひたすら懐かしい日々である。

歳を重ね、経験を積むことで、私たちは利口になる。あらかじめ危険を避けるよう行動を規制していく。思い立ってもなかなか行動に至らなくなる。それはそれで穏やかな日々を生きていくための人生の知恵である。しかしながら運命の奔流は、私たちのささやかな営みを瞬時に崩壊させる。今回の東日本大震災がまさしくそれである。連日報道される被災地の人々の惨状を見聞きするにつれ、直接被害に遭っているわけでもない私たちまでもが、底知れぬ虚無感にとらわれてしまう。私たちの小利口に計算して生きる生き方そのものを、圧倒的な破壊力で否定されたような気がする。

被災地でも卒業式や入学式が行われている。多くの家族や同級生が亡くなり、行方不明の中で行われた式である。子供たちが健気に、新たな旅立ちに向けて抱負を述べる様子を伝える映像に、思わず涙してしまう。しかし一方でその光景の中に、再生に向けて差し込んだ一条の光を見たのは私だけではないだろう。

私たちの三友会もまたこの4月、大切な仲間と別れなければならない。妻が倒れて途方に暮れていた時、ご家族を熊本に残したまま駆けつけてくれた松本先生が熊本の病院に帰ることになった。最初は1年の予定であったが無理を言って引き延ばしてもらっていた。2年間、毎週高速バスで通っていただいたご苦勞を考える時、先生とご家族に対していくらか感謝してもしきれない思いである。

先生との出会いは、えびの高原で第1回のホームホスピス協会の全国大会を開催した際に、当時がんセンターにいた先生が参加されたのが始まりであった。レセプションの席で、会を盛り上げるために私が女装をして司会をした。その際に渡した名刺を持ち続けていたとのことであった。あの頃、子供たちは小学生で、ドレスに身をまとった私を「わー、お父さん綺麗」とほめてくれたが、妻は「今度だけよ、もう一回女装したら離婚よ」と顔をしかめながら化粧を施してくれていた。そんな私の無邪気な行動が15年後、先生を宮崎に呼び寄せた。「万佐子先生は必ずテイラー博士のように復活しますよ」とことあるごとに励ましてくれる松本先生との再会に、妻もあの時の私を許してくれているはずである。

心豊かになれた2年間でした。松本先生、ありがとう。そしてさようなら。

コラム



山口 澄夫

日向灘にも「ナマズ」が居た

今回のコラムも宮崎観光地に関するお話をしようと準備しておりましたが、3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震により急遽変更して、過去に宮崎であった地震・津波について書きます。

「^{とんどころ}殿所大地震」

約350年前の寛文二年(西暦1662年)9月19日子の刻(夜中12時)に起きた地震は日向史上空前の大地震であった。

このころは一カ月ばかり雨ひとつ降らず、海面も毎日気味の悪い程穏やかで特に19日夜は暑苦しかったと言われている。そこに今でいう震度7以上の未曾有の地震とともに大波が押しよせて、下加江田村、本郷など(今の青島付近)が陥没して海の底に沈んだと言われている。この地震により海となったのは七つの村と周囲10キロメートル、田畑八千五百石余りに及んで、米粟二千三百石余りが流出した。潰れた家千二百十三戸、うち海に沈んだ家二百四十戸、人員二千二百十八人が一夜にしてこつ然と海の底に沈んでしまったとの記録が残されている。(図書館調べ)

災害が起きた時、我が身は自分で守らなければならない。最低3日分の水(ペットボトル3本)、乾パン1袋位常備しておきたい。

いざというときの非常用品リスト(例)

- 水(1人1日3リットル)
- 食糧(缶詰、乾パン、レトルト食品、飴など)
※食料と水は3日分必要
- 電池、ラジオ、懐中電灯
- ヘルメット、軍手、レインコート
- 現金、保険証、アドレス帳、貴重品
- 下着、タオル、ティッシュ、生理用品、おむつ
- マッチ、ライター
- 運動靴、または底のあついスリッパ(足をガラス等から守るため)

『第14回宮崎県老人デイケア研究大会を振り返って』

祇園デイサービスセンター管理者 田原公彦

大震災の2日後ということもあり、交通事情等で参加キャンセルもありましたが、200名以上の参加者を得て、無事に終了することができました。前日のプレセミナーは35名が参加し、人間関係アプローチ宮崎“きらきら”の辰身信子氏による『相手の心を開くために必要な援助とは?』というテーマで講演がありました。参加者同士で具体的な会話のシミュレーションをしながら、どのような声掛けが相手の心を開くことができるかを体験することができたようです。「介護・看護は解語から」というフレーズがとても印象に残る講演でした。

大会当日の午前8時半にスタッフは集合し、屋外で展示パネルの組み立てなどの準備を始めました。9時の開場と同時に受付や会場内の展示会場のセッティングを開始しましたが、時間にゆとりがなく、参加者にはたいへんご迷惑をおかけしたのではないかと反省しています。予定通り9時55分に開会式、10時から高口光子氏による『元気になる介護のはなし』の特別講演が始まりました。現在、介護老人保健施設の看介護部長という立場で現場の第一線でスタッフの指導をしておられる氏だからこそ、本当に現場の人間の心にぐっとくる話をしていただけだと思います。

午後は3会場に分かれて『食事』『認知症』『送迎』のテーマで分科会が行われました。それぞれのテーマでユニークな取り組みを行っている施設からの発表を受けて、ディスカッションや座長による講演など、各会場とも約2時間にわたり熱心な討論が行われたようです。

3時からお二人のベテランケアマネージャーによる教育講演が行われました。嶋田氏からはケアマネの立てたケアプランを各事業所の職員全員で共有してほしい、そして一人ひとりのご利用者の具体的現実的な目標を共有してサービス提供を行うような事業所がこれからは選択されるというアドバイスをいただきました。原村氏からは通所リハビリはリハビリテーションを行うことが使命である。ご利用者の在宅生活の不安を解消し、心を動かすようリハビリを提供してほしい。そして、デイケアでの様子をしっかりとケアマネに情報提供してほしいとの提言をいただきました。

大会開催中にご利用者、患者様の渾身のこもった数々の作品も展示致しました。
人生の集大成とも言える作品に、多くの感動が生まれていました。



宮崎で出会ったすべての人に感謝を込めて

～2011年4月～

副院長 松本武敏

手元に1998年夏、えびの市で開かれた第1回在宅ホスピス協会全国大会のプログラムがあります。8月23日のシンポジストの中に、石川智信院長と、当時、千葉県柏市の国立がんセンター東病院にいた私の名前が並んで記載されています。2001年に熊本に帰った私が、その後、東京で在宅ホスピスを経験し、2009年から2年間三友会で働かせていただくことになったのは、人と人との出会いの積み重ねとしか言いようがありません。

開業医の在り方を模索していた私が、2008年8月に院長と宮崎観光ホテルで再会したときのことを今でも鮮明に覚えています。生協病院の連携の会でお忙しいにも関わらず、初めてお会いする万佐子先生と一緒に「蓬や」で会食をさせていただきました。その髪の長い万佐子先生が、数週間後に倒れられたと聞いたとき、言いようのない驚きと、あってはならないことへの悔しさがこみ上げてきました。

これは2009年4月に、お元気になられた万佐子先生が参加されたレミューズでの懇親会でも述べたことですが、多くの診療所の在り方をみてきた私としては、いしかわ内科のスタイルは、現状の日本において考える最良の方法のひとつであると確信しています。ただ、複数の医師で運営されなければ、医師が倒れることとなります。実際、宮崎に来て耳にしたのは、2008年当時、いつ院長が倒れてもおかしくないぐらい忙しい毎日であったとのことでした。

2009年に赴任する直前、熊本で父のすい臓がんが判明し、2週間ほど宮崎に来るのが遅くなりました。幸い抗がん剤治療が奏功し、現在も元気に過ごしておりますが、父の残された時間を考え、私は、三友会便りの自己紹介に、1年間お世話になると書いていました。が、正直、居心地の良さからさらに1年宮崎に通わせていただくことにしました。その理由は、「仲間を大切に作る組織文化」が三友会には根付いているからだと思います。勿論、組織というのは永遠に成長するものだし、その時その時のメンバーによって変化を来します。組織が常に発展途上であることは間違いありませんが、「支えることで支えられる」というポリシーは、病気で入院を余儀なくされた同僚を支えていた様子や仲間がカバーし合うそれぞれの部署の様子など、数知れず思い浮かびます。また、リハや介護が主になって、デイケア全国大会や対外的な活動を運営している姿も、通常の診療所のレベルでは考えられないことだと思えます。

そして何よりも、外来で出会う患者さんたちとの関係性により、私自身はもう一年間、宮崎に通わせていただきたいと願いました。特に、開業に向けてのモチベーションを高めてくださったのは、宮崎の高齢の女性の方々でした。「何々ですわぁ」「よだきい」とおっ

しゃって、甘いものを好むお年寄りの方々との会話が、この上もなくありがたい診療であったことは、医師人生において不思議な空間と時間でした。その結果、熊本で開業する前に、リハビリテーションの勉強をしようとして次の勤務先を考えたのも、デイケア・デイサービスを通してのいしかわ内科での日常診療を経験したからだと言えます。



万佐子先生が、第一線に戻られるには、まだ5-6年（万佐子先生はもっと早いとおっしゃるかもしれませんが（笑い））かかります。チームワークで乗り切りましょう。

宮崎の空の青さは格別です。宮崎にいと、当たり前すぎてその素晴らしさがわからないかもしれません。南方系の私は、亜熱帯に属する自然をもつ宮崎に、ホッと居心地の良さを感じ、宮崎をこの上なく愛するようになりました。

この春からは、熊本託麻台病院という在宅療養支援病院で1年半ほど勤務します。どうぞ機会がありましたら熊本に訪ねて来てください。皆々様、お世話になりました。本当にありがとうございました。



松本先生 お疲れさまでした！

平成21年3月より2年間にわたり、副院長としていしかわ内科を支えてくださいました松本先生が4月15日をもちまして熊本に帰られることになりました。いつも明るい先生がいなくなるのはさみしいですが、熊本の医療の為に頑張っていたかたいたいと思います。先生、本当にありがとうございました。

新 人 紹 介



いしかわ内科 医師
山田 琢也先生

4月より診察に加わらせて頂いています。慣れるまで迷惑をかけますが、昨日より今日、今日より明日の精神で取り組みます。宜しくお願ひします。



いしかわ内科
デイケア
介護福祉士
甲斐真由美

H23.3.14よりデイケアで介護福祉士として勤務させて頂いています。H23.3.5に宮崎保健福祉専門学校を卒業し、働かせていただいています。一日も早く仕事を覚え、頑張りたいと思います。ご利用者の皆様と一人一人寄り添い、関わり、たくさんの笑顔を見ることが出来たらと思っております。一生懸命頑張りますので、皆様よろしくお願ひします。

神宮西町ミニバレーボール大会



2月6日に行われた神宮西町ミニバレーボール大会に、今年もいしかわ内科から2チーム参加しました。

毎月2回の練習にも行かせていただいております。その成果を発揮するべく最強Aチームとその他(?)Bチームで挑みました！

結果は・・・！？

いしかわAチーム 優勝！！

いしかわBチーム 予選敗退

決勝進出ならず・・・(笑)

優勝の豪華景品をいただきました。試合の後にいただく、婦人会の方々が作ったカレーは格別です。楽しい1日をありがとうございました。



神宮西町文化祭



3月13日に神宮西町の文化祭が行われました。公民館には地域の方の素晴らしい作品が展示され、外では子供たちのくじ引きや焼そばなどの販売、ぜんざいのふるまいなどがありました。当院スタッフも微力ながらお手伝いをさせていただき、ワイワイと楽しい時間を過ごしました。神宮西町の皆様、お疲れさまでした。そして、焼きおにぎりご馳走さまでした・・・！

編集後記～ 17年前の阪神淡路大震災の際に関西にいた私は、頭のすぐ横にテレビが落下しタンスの下敷きになりながらも、ケガひとつなく無事でありました。今回の東日本大震災の被害の大きさを見聞きするたび、わたしたちが生きているということは奇跡なのだなあと感じます。

被災地の復興を心よりお祈りし、微力ながら応援していきたいと思っております。

K.K